OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	人々の意識から見る言語の重要度の変化 : タンザニアのイラク語圏とマシャミ語圏における事例から
Author(s)	沓掛, 沙弥香
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 2015, 26, p. 60-78
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72970
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

人々の意識から見る言語の重要度の変化

― タンザニアのイラク語圏とマシャミ語圏における事例から ―

沓掛　沙弥香

0. はじめに

タンザニアは、その国内で少なくとも 120 以上の言語が話されていると言われる多言語国家でありながら、国民のほぼ 100%がスワヒリ語というひとつの言語を理解すると言われる、アフリカ大陸においては稀有な言語状況を有する国である。1961 年にイギリスから独立したタンガニーカは同年スワヒリ語を国家語に制定し、1964 年にザンジバルと合邦してタンザニアとなった際にもこれを受け継いだ。さらに 1967 年のアルーシャ宣言の年にはスワヒリ語を英語と並ぶ公用語にも制定している。以来、国家統一の言語としてスワヒリ語の推進がなされ、全てのレベルの教育でスワヒリ語を教授用言語とすることが目的とされた。そのため、まず小学校の教授用言語をスワヒリ語とし、同時にさまざまな研究機関を設立して、スワヒリ語の発展を進め、高等教育を担うことのできる言語とするための準備を進めてきた(小森・竹村 2009)。

しかしながら、そのタンザニアにおいて、近年英語の使用を推進する動きが加速している。1990 年代以降、英語を教授用言語とする私立小学校が急速に普及したことに加え、2010 年度の教育政策では、公立小学校においても英語を教授用言語として選択することが可能となった。教授用言語をめぐる問題の動向は、タンザニアにおけるスワヒリ語の地位と発展の方向性を物語るものとも言えるため、このような英語使用推進の動きの加速は、タンザニアの言語状況に大きな変化をもたらす可能性がある。また、小学校における教授用言語の変更は、民族語が比較的活発に用いられる地域社会におけるスワヒリ語の運用能力の低下につながる恐れもある。

しかし、これまで行われてきたタンザニアの言語状況に関する研究は、主に、教授用言語をめぐるスワヒリ語と英語の相克に焦点をあてたもの (Rubagumya 1986、竹村 1993、Brock-Utne et al. 2003, 2010、Qorro 2006, 2013 など)と、民族コミュニティにおける民族語の使用領域へのスワヒリ語の浸透や言語の取り替え状況に焦点をあてたもの (Heine 1976、Polomé 1980、Mekacha 1993、Yoneda 1996、佐藤 2000、Msanjila 2004 など) とに二分され

てきた。

しかしながら、教授用言語をめぐる問題がスワヒリ語と英語のみに焦点をあてて議論されることで、言語選択を行う当事者が「タンザニア人」というカテゴリーに集約されてしまい、さらに「タンザニア人」という集団がカテゴリーとして強調されることで、民族的カテゴリーとの結びつきが比較的強い地域がこの問題をめぐる議論から抜け落ちる結果を招いている。そのため、英語使用を推進する動きがあたかも「都市部の問題」のように現れてしまっているのであるが、果たして本当にそうなのだろうか。もし、都市部以外の地域においても英語偏重主義的な言説が普遍化しているような状況があるとすれば、そのような言語態度は今後のタンザニアの人々の言語使用に十分な影響を与える可能性を持っている。つまり、使用領域の問題に関しても、「家庭」や「民族コミュニティ」のような民族語の使用領域に浸透する可能性のある言語は、もはやスワヒリ語だけではないかもしれないのである。英語に対する人々の積極的な態度と特に小学校のような公的領域における英語使用の拡がりが同時に進行していけば、民族語の使用領域に将来的に英語が浸透する可能性もないとは言えないのである。しかし、このような視点から民族語・スワヒリ語・英語について包括的に扱った研究はこれまでほとんど見られなかった。

このような問題意識から、筆者はこれまで、民族語が比較的活発に用いられていると考えられる地域で、民族語・スワヒリ語・英語への言語態度や教授用言語に関する態度を明らかにするための調査を行ってきた。本稿では、現段階で得られているデータを示すことにより、これまで考えられてきたタンザニアにおける人々の言語態度、特に、民族語・スワヒリ語・英語の重要度に対する認識の変化を示すことを目的とする。

なお、本稿において文献研究の対象となっている地域及び筆者が調査を行った地域は、タンザニア大陸部（旧タンガニーカ）のみである。そのため、本稿で「タンザニア」と言った場合、基本的にはザンジバル諸島を含まない大陸部のみを意味するものとする。

1. タンザニアにおける言語政策と言語状況概要 —民族語・スワヒリ語・英語

すでに述べた通り、タンザニアでは近年英語の使用を推進する動きが加速している。独立当初より目標とされてきた全てのレベルの教育におけるスワヒリ語の使用は果たされず、教授用言語をめぐる議論における「スワヒリ語使用推進」の声は先細りとなっている。

1986 年に受け入れた構造調整政策の一環として、1990 年代以降教育の民営化に着手することになったタンザニア政府は、まず 1992 年に私立の小学校において英語を教授用言語に

することを公式に認めた (Swilla 2009: 4)。さらに 2000 年には、小学校修了時の国家試験を英語で受けることを選択することが可能になった (Swilla 2009: 6)。

これらの政府の動きに加えて、重要なのは一般の人々の英語を望む声の高まりである。保護者の間でそのような声が高まっていることは Rubagumya (2003)によってすでに報告されていたが、筆者が 2012 年に行った中高生へのアンケート調査によって、多くの生徒が小学校の教授用言語を英語に変更することを希望していることも明らかになった。また、Brock-Utne が 2001 年に行ったインタビューにおいて、当時教育大臣であった Joseph Mungai は、「中学校でもスワヒリ語を教授用言語とすることの意義」や「英語を教授用言語として教えることの弊害」についての訴えを行っているのは主に大学教授であり、地域社会からは小学校教育を英語で行うための許可を求める多くの申請書を受け取っていると述べている（Brock-Utne 2002: 33）。そして 2009 年には、就学前教育から高等教育までのすべてのレベルで、英語を教授用言語とする政策草案が提案されたという(Qorro 2013: 29)。

実際に公開された 2010 年度の教育政策を見てみると、以下のようになっている。

> 就学前教育の教授用言語はスワヒリ語である。
> 小学校教育の教授用言語はスワヒリ語と英語である。
> 中学校・高校教育の教授用言語はスワヒリ語と英語である。
> 高等教育の教授用言語は英語である。
>
> (Sera ya Elimu na Mafunzo 2010: 39、筆者訳、下線筆者)

小学校教育を英語で行うことを強要する内容ではないが、公立の小学校においても英語を使用することが可能となる内容である。1995 年の教育政策では、小学校教育の教授用言語をスワヒリ語とし、英語は必修科目とすることが明言されていた(MEC 1995)が、上記の 2010 年度版では、教授用言語の選択に際し、新たに「英語」という選択肢が追加されることとなった。この選択がどのような基準で、また、誰の権限で行われるのかなどの問題については言及されていないが、すでにこの政策に従って教授用言語を英語に変更する都市の小学校がいくつか出てきているようである (HABARILEO)。

一方、タンザニアにおいて民族語は「国家統合」を脅かす存在として政府から疎まれてきた(Legère 2002: 169-170)。1997 年の文化政策においてようやく民族語の価値が強調され、その使用の推進が謳われたが、具体的な政策は打ち出されておらず、公的な使用には制限

がかかっている (Muzale et al. 2008: 69)。

「家庭」や「民族コミュニティ」のような使用領域においても、民族語の使用は衰退しているようである。特に 1974 年以降に行われた調査では、いずれもスワヒリ語が民族語の領域に浸透していっているという結果が出ており、Mekacha (1993)、Yoneda (1996)、佐藤 (2000)、Msanjila (2004)の調査では、いずれも世代が若いほどスワヒリ語を使用する傾向が強くなることが報告されている。特に、Msanjila (2004)の調査地は、民族間の婚姻も非常に少なく、村人の 99.5%が単一民族であり自給農業を行っているにも関わらず、若い世代の 10%がスワヒリ語を第一言語として習得し、46%が「隣人」に対してスワヒリ語を使用している (Msanjila 2004: 165, 167)。

また Mekacha (1993: 200)は、民族的アイデンティティに基づく民族語への統合的志向が民族語の存続にとって非常に重要な基盤となっているとしていると指摘している。しかし、近年のタンザニアにおいては、民族的アイデンティティと言語的な能力や実践がすでにかなり非対象なものとなっていると言われており、特に若い世代においては、民族語の運用能力はもはや民族的アイデンティティの固有の要素ではなくなってきている (Legère 2002: 166)。つまり、民族的な差はあれ、若い世代においては「民族的アイデンティティに基づく民族語への統合志向」というシナリオがすでに成り立たなくなっているか、非常に脆弱なものになってきていることが予想され、民族語の更なる衰退に結びついていることが考えられる。

2012 年 9 月に現地の中学校教師を協力者として筆者が行ったアンケート調査の結果は、この推測を裏付けている。この調査は、アルーシャのイルボル中・高等学校の 1 年生から 6 年生まで（年齢は 13 歳から 23 歳まで）の 58 人を対象に行ったものである。これらの学生の自己申告による民族と第一言語をまとめると表 1 のようになる。

回答者の民族は 25 にわたるが、それぞれの第 1 言語では「スワヒリ語」と答える者が約 53%

表 1: 民族と第一言語

民族		第一言語	
キンガ	1	キンガ語	0
クリャ	1	クリャ語	0
サング	1	サング語	1
ジタ	2	ジタ語	1
スクマ	8	スクマ語	4
チャガ	6	チャガ語	2
ディゴ	1	ディゴ語	1
ニャキュサ	1	ニャキュサ語	1
ニャトゥル	2	ニャトゥル語	0
ニャムウェジ	3	ニャムウェジ語	2
ニャンボ	1	ニャンボ語	1
ハ	4	ハ語	1
ハヤ	1	ハヤ語	1
パレ	4	パレ語	2
ベナ	2	ベナ語	1
ヘレ	4	ヘレ語	1
ソマリ	1	ソマリ語	1
マクタ	1	マクタ語	1
マサイ	4	マサイ語	1
ランギ	2	ランギ語	0
ルオ	1	ルオ語	1
ロンゴ	1	ロンゴ語	1
ンギンド	1	ンギンド語	1
ンゴニ	4	ンゴニ語	0
ンブグ	1	ンブグ語	1
スワヒリ	0	スワヒリ語	31
合計	58	英語	1
		合計	58

で圧倒的に多くなる。一方で、自分の民族をスワヒリ人と答えている生徒はいない。さらに、母親と父親の民族語と第 1 言語が一致する 30 人のうち、家族との会話でスワヒリ語を使うと答えたのは 16 人、民族語とスワヒリ語の両方を使うと答えたのは 5 人、民族語だけを使うと答えたのは 9 人であった。また、第 1 言語を民族語と答えている 27 人のうち、「家族と話す時に使う言語」としてスワヒリ語のみを答えているものが 8 人いた。第 1 言語を英語と答えた 1 人については、父親がガーナ人であり、家庭で用いられる言語が英語であったために、英語が第一言語となっている。

また、家族との会話に使用する言語について、1974 年に行われた Brauner et al. (1978)の調査と比較すると、表 2、3 のようになる。

表 2:家族との会話に使用する言語(1970 年)	
スワヒリ語	14%
スワヒリ語と民族語	25%
民族語	60%

（Brauner et al. (1978)の調査より筆者作成）

表 3:家族との会話に使用する言語〈2011 年〉	
スワヒリ語	62%
スワヒリ語と民族語	10%
民族語	20%

（筆者による 2011 年の調査より筆者作成）

まず、1974 年の調査と 2011 年の調査で、スワヒリ語と民族語の割合が逆転していることがわかる。さらに、「民族語」という回答と「スワヒリ語と民族語」という回答を合わせると、1974 年の段階では 85%が「家庭」で民族語を用いる機会があったが、2012 年の筆者の調査では 30%に減少している。Brauner et al.(1978)と同様に、筆者の 2011 年の調査においても、調査対象者が「それぞれ地域社会を離れて高等教育を受けているエリート」に限定されてしまってはいるが、明らかな数字の変化から、民族語の衰退が読み取れると言ってよいだろう。

2. イラク語圏とマシャミ語圏における調査

本節では、2013 年の 9 月から 10 月のおよそ 1 か月間にアルーシャ州カラトゥ県とキリマンジャロ州ハイ県で行ったイラク語話者とマシャミ語話者への言語態度に関する聞き取り調査の結果を紹介し、これらの地域における言語状況や話者の言語態度について考察する。

2.1 調査概要

本調査は、イラク語圏、マシャミ語圏のそれぞれの地域で、個人を対象とした半構造化インタビューを行い、各地域の話者の言語使用に関する意識や言語態度を明らかにしようとしたものである。インタビューの所要時間は 1 人あたり 30〜70 分ほどであり、イラク語圏で 32 人、マシャミ語圏で 30 人の調査協力者に対してインタビューを行った。調査における言語は、調査協力者にスワヒリ語と民族語からより使用しやすい言語を選んでもらい、スワヒリ語の場合は筆者が直接、民族語の場合は通訳を介して聞き取りを行った。

これらの地域は、スワヒリ語の浸透度がほぼ 100%と言われるタンザニアで、日常的な民族語の使用が比較的活発な地域である。また、タンザニアにおけるスワヒリ語の使用領域拡大の理由の一つは、タンザニアの民族の 90%以上がスワヒリ語と同じバントゥ諸語の話者であったことだと考えられているため、調査はバントゥ諸語の一つであるマチャメ語圏と非バントゥ諸語のイラク語圏で行い、それぞれから得られた結果を比較することを目的とした。なお、イラク語圏については、民族的均質性が高い農村部と、他の民族が混在する経済的中心部では言語状況に明らかな違いが見られたため、次項以下の分析においては、イラク語圏を農村部と中心地の 2 つの地域にわけて扱う場合がある。農村部と中心部の調査協力者の内訳は、それぞれ 20 人と 12 人である。

2.1.1 イラク語概要

イラク語は、アフロアジア諸語のクシ系諸語のひとつであり、ニジェール・コンゴ諸語のバントゥ諸語のひとつであるスワヒリ語とは全く異なる語族に属する。Muzale et al. (2008: 79-80) によると、イラク語話者数は 602,661 人であり、彼らが観測したタンザニア国内の 156 の言語のうち、12 番目に多くの話者を持つ言語である。Mous (1993: 4)によると、イラク語圏では話者の活発な移動が行われており、明らかな差異を有する方言は存在しない。

イラク語は正書法を有する言語である。イラク語の正書法にはスワヒリ語の正書法にはない 2 つの文字が使われおり、それらは、無声口蓋垂破裂音を表すq[1]と無声軟口蓋摩擦音を表すxである。さらに、咽頭摩擦音と声門閉鎖音はそれぞれ（ / ）、（ ' ）という記号で表される。このような記号の存在のために、たとえ民族語での読み書きを好み、言語学的な知識がある人であっても、イラク語の正書法についての基礎的なガイダンスを受けたこ

[1]スワヒリ語でも Qurani、Qibla など、例外的に q の表記があり得る。

とがなければ理解が難しいものとなってしまっていることが指摘されている (Muzale et al. 2008: 74)。実際の調査でも、「自分はイラク語を知っているが、イラク語を書くことも読むこともできない。イラク語は難しい言語である」というような意見が多くの人から聞かれ、このような書記形態の弊害がうかがわれた。

2.1.2 マシャミ語概要

マシャミ語は、ニジェール・コンゴ諸語のバントゥ諸語のひとつであるスワヒリ語と同じ語族に属する言語であり、キリマンジャロ州の主要民族であるチャガ・グループの民族の一派であるマシャミ人によって話されている。チャガ・グループは、もともと異なる言語を話す集団がイギリスの間接統治下で属すべき集団を自ら再形成していった結果生まれたグループであり、一つの民族として「チャガ人」と名乗ることが多い。Muzale et al. (2008: 83) によると、チャガ・グループの中では少なくともマシャミ、モチ、ヴンジョ、ウォソ、ロンボ、ウルの 6 つの言語がはっきりとした境界をもってそれぞれの地域で話されているが、それぞれのホームランドの外で彼らを言語別に区別することは容易ではない。そのため、Muzale et al. の調査においては「チャガ」というカテゴリーが採用されており、チャガ語の話者数は 273,474 人で、タンザニアで 31 番目に多い話者を持つ (Muzale et al. 2008: 79-80)。今回筆者が行った調査においても、チャガ人としてのアイデンティティとマシャミ人としてのアイデンティティが平行して用いられたが、今回の調査ではマシャミ語話者のホームランドにおいて、マシャミ語話者に対象を絞って調査を行ったため、チャガ人ではなくマシャミ人に関するデータとして扱う。

2.2 各地域における言語使用に関する意識および言語態度の比較

本項では、各地域における言語使用に関する意識や、民族語や教授用言語に関する言語態度の比較を行う。

2.2.1 イラク語圏における中心部と農村部の比較

まず、イラク語圏において、民族的均質性の高い農村部と、民族の混在が認められ比較的スワヒリ語の使用が活発な中心部の言語使用に関する意識の比較を行う。イラク語圏農村部では、スワヒリ語の運用能力が不十分な高齢者や学校教育で十分なスワヒリ語の習得に至らずスワヒリ語に苦手意識を持ったままの若年層などが見られ、20 人中 4 人がイラク

語でのインタビューを望み、それ以外の人に関しても、インタビュー中に質問の内容や答えの内容をイラク語で通訳に確認することが多々あった。また、学校の教師や外部からくる教会の牧師を除いて、ほとんどの村人がイラク人である民族的均質性の高い地域であった。

一方、中心部であるカラトゥ市は、イラク人のほかに、マサイ人やダトーガ人などいつかの民族が混在している地域であり、近年ではあらゆる地域からの人の流入が増加しているため、スワヒリ語の使用が比較的活発な地域である。この地域では、学校教育を受けていない年配層の女性 1 人がイラク語でのインタビューを望んだ。

これらの地域で、「家庭」で使用する言語について尋ねたところ、表 4 のようになった。

表 4:イラク語圏農村部と中心部における比較: 「家庭」における使用言語に関する意識

言語	農村部		中心部	
	人数	%	人数	%
イラク語	16	80	2	17
スワヒリ語	0	0	8	66
イラク語とスワヒリ語	4	20	2	17

表 4 から、農村部では、ほとんどの人が家庭において民族語であるイラク語を使用すると答えた一方で、中心部においてはほとんどの人が「家庭」ではスワヒリ語を使用すると答えていることがわかる。また、中心部では、「孫の世代がすでにイラク語を話すことができなくなっているために、家ではスワヒリ語を用いるしかない」という声が多く聞かれ、「家庭」におけるスワヒリ語の使用が活発な状況がうかがえる。

続いて、「民族コミュニティ」における言語使用に関する意識について見る。表 5 から、農村部においては、年配層、中年層、そして就学前の子どもに対しては多くの人がイラク語のみを用い、若年層に対してはスワヒリ語使用の割合が高くなることがわかる。この地域で就学前の子どもに対して、イラク語のみを用いると答えた人が多いことは、家庭内での活発なイラク語の使用を意味し、表 4 の結果とも一致する。このことから、イラク語圏農村部では「家庭」という領域における活発な民族語の使用状況が保たれていると考えられる。また、地域社会においてもイラク語の使用は活発であるが、若い世代に対してスワヒリ語を使用すると答えた人が多い状況から、言語の取り替えは農村部においても進行していく可能性がある。

表 5:イラク語圏農村部と中心部における比較:「民族コミュニティ」における言語使用に関する意識

地域	言語	対話者							
		年配層	%	中年層	%	若年層	%	就学前の子ども	%
農村部	イラク語	19	95	15	75	7	35	12	60
	スワヒリ語	0	0	1	5	6	30	3	15
	イラク語とスワヒリ語	1	5	4	20	7	35	5	25
中心部	イラク語	5	42	3	25	0	0	0	0
	スワヒリ語	0	0	3	25	8	67	9	75
	イラク語とスワヒリ語	7	58	6	50	4	33	3	25

一方、中心部では年配層と中年層においては「イラク語とスワヒリ語」の両方を用いる割合が高く、若年層と就学前の子どもに関しては、「スワヒリ語」の割合が高くなっていることがわかる。特に就学前の子どもに対してスワヒリ語で話すという意識が高いことは、家庭における言語の取り替え状況が進行していることを示唆しており、表 4 の結果とも一致する。

これらの地域で自分の人生におけるもっとも重要な言語を聞いたところ、農村部では 5 人がイラク語を挙げ、それ以外の人はスワヒリ語と答えた。この地域では、自分の人生における最も重要な言語として英語を挙げた人はいなかった。一方農村部では、2 人が英語、10 人がスワヒリ語と答えた。英語と答えた 2 人のうち 1 人は、学校教育を受けておらずスワヒリ語の運用能力が不十分な状況であるが、自身の息子たちが弁護士やビジネスマンとして海外で活躍しているような状況から、英語に対して非常に肯定的な態度を示した。この地域では自分の人生におけるもっとも重要な言語としてイラク語を挙げた人はいなかった。

2.2.2 イラク語圏とマシャミ語圏の比較

続いて、民族の違いに注目し、イラク語圏全体[2]とマシャミ語圏についての態度を比較する。マシャミ語圏では、すべての人がスワヒリ語でのインタビューを希望し、英語へのコード・スイッチやコード・ミックスが積極的に用いられた。また、すべての人が民族語

[2] イラク語圏農村部と中心部を合わせたものを指している。

の衰退を感じていると答えたが、その理由として 30 人中 8 人が「スワヒリ語と英語の使用の拡がり」という理由を挙げるなど、生活圏における英語の存在が強く意識されていることが感じられた。

この地域で、「家庭」で使用する言語について尋ねると表 6 のようになった。

表 6:イラク語圏とマシャミ語圏における比較:「家庭」における言語使用に関する意識

言語	イラク語圏		マシャミ語圏	
	人数	%	人数	%
民族語	18	56	3	10
スワヒリ語	8	25	17	57
民族語とスワヒリ語	6	19	10	33

表 6 から、マシャミ語圏では半数以上の人が家庭においてスワヒリ語のみを使用している様子がわかる。また、「マシャミ語とスワヒリ語」の両方と答えた人のうち、3 人はスワヒリ語をより多く使うと答えた。さらに、自分の妻や夫とはマシャミ語で話すが、子どもや孫に対してはスワヒリ語を用いると答えた人もいた。一方、スワヒリ語のみを用いると答えた人のうち、6 人が若年層、8 人が中年層、3 人が年配層であり、一緒に住んでいる子どもや孫がスワヒリ語しか話せないために、家庭でもスワヒリ語のみを用いると答えていた。

イラク語圏と比較すると、明らかな差が見られる。イラク語圏では、「家庭」において民族語の使用機会があると考える人が 7 割を超えるが、マシャミ語圏では 57%の人がスワヒリ語のみを使用すると答えており、さらにマシャミ語のみを使用すると答えた人はわずか 3 人であった。これは実際の言語使用を表すものではないが、少なくとも意識の面で、スワヒリ語の浸透度合いに明らかな違いがあることがわかる。

続いて、「民族コミュニティ」における言語使用に関する意識を見てみる。表 7 から、マシャミ語圏においても年配層に対しては積極的な民族語の使用が行われているが、それ以外の世代ではスワヒリ語が主な使用言語となっている状況がわかる。特に就学前の子どもに対してほとんどの人がスワヒリ語を用いると答えている状況は、イラク語圏とは異なり、子どもたちが家庭でスワヒリ語を習得することが当然となっている状況を表していると言える。

表 7:イラク語圏とマシャミ語圏における比較:「民族コミュニティ」における言語使用に関する意識

言語		対話者							
		年配層	%	中年層	%	若年層	%	就学前の子ども	%
イラク語圏	イラク語	19	95	15	75	7	35	12	60
	スワヒリ語	0	0	1	5	6	30	3	15
	イラク語とスワヒリ語	1	5	4	20	7	35	5	25
マシャミ語圏	マシャミ語	16	53	7	23	0	0	0	0
	スワヒリ語	4	13	15	50	21	70	27	90
	マシャミ語とスワヒリ語	10	33	8	27	7	23	2	7
	英語とスワヒリ語	0	0	0	0	2	7	1	3

さらに、マシャミ語圏では、若年層に対して 2 人、就学前の子どもに対して 1 人が「英語とスワヒリ語」を用いると答えており、自分の人生におけるもっとも重要な言語として英語を挙げた人も 10 人に上った。これらの状況から、この地域ではイラク語圏に比べると英語の存在が強く意識されていると言えるのではないだろうか。

2.2.3 民族語に関する言語態度

イラク語圏においては、イラク語に対する消極的な態度が目立った。このような態度について、農村部と中心部で大きな違いはなく、むしろ農村部において、強い口調で民族語の不必要性を説く人が目立った。インタビューの媒介言語としてイラク語とスワヒリ語のどちらを使用したいかを尋ねた際や、自分の人生における重要な言語、タンザニアという国家における重要な言語について尋ねた際、選択肢にイラク語が入っていることにみな驚き、“Kiiraku hapana(「イラク語はない」)”のような一言が必ず付け加えられた。また、“Kiiraku sikitaki(「イラク語は嫌だ」)”、“Kiiraku hakifai kwa watoto(「イラク語は子どもたちにふさわしくない」)”のような、強い嫌悪感を示した人も多かった。

イラク語圏では 32 人中 11 人が「イラク語が衰退し、将来的に消えても問題ない」あるいは「イラク語は消えてしまった方がよい」というような、民族語の衰退を肯定し受け入れる回答をした。

また、マシャミ語圏においても民族語に対してイラク語圏とほぼ同様の態度が示された。

イラク語圏で見られたような強い嫌悪感はなかったものの、「学校での使用価値のない言語なので消えてしまってもよい」、「それ（民族語の衰退）が発展というものである」というように、民族語の衰退を受け入れる回答をした人は 30 人中 11 人に上った。

3 節 で述べたように、Mekacha (1993) は民族的アイデンティティに基づく民族語への統合的志向が民族語の存続にとって非常に重要な基盤となっているとしている。マシャミ人を含むチャガ・グループは、タンザニア国内で多くのエリートを輩出するなどステイタスの高い民族であるとの自負から、チャガ人としての民族アイデンティティを重要視してきた民族であり、佐藤 (2000) の調査でも、民族語継承のための積極的な態度が指摘されていた。しかしながら、マシャミ語圏においてもかつて見られた民族語の継承活動 [3]は衰退しており、先述の言語使用に関する意識調査のデータが示す通り、「家庭」での民族語の継承も活発に行われてはいないようである [4]。

また、イラク語圏、マシャミ語圏の両方で、民族語が衰退することはあってはならないと答えた人の多くが、民族語の歴史的・文化的価値や民族アイデンティティにおける民族語の重要性について語ったが、具体的にどのように存続していくべきかについては、ほとんどの人が「家庭での使用」というあいまいな答えにとどまった。また、「家庭での使用」によって民族語を存続させるべきと答えた人の多くが、「家庭」における使用言語はスワヒリ語であると答えている状況もあり、民族語保持への意識は高いとは言えない。

2.2.4 教授用言語に関する態度

続いて教授用言語に関する言語態度を見ていく。ここでは、イラク語圏の農村部と中心部でも一定の差がみられたため、イラク語圏農村部と中心部、マシャミ語圏の 3 地域を比較する。

教授用言語について、「すべての教育レベルにおける言語を 1 つに統一することが可能であるとするならば、「民族語」「スワヒリ語」「英語」のうちどれを望むか」という質問と、「自由に選ぶことができるならば、子どもにどの言語を教授用言語とする学校で教育を受

[3] 調査協力者の 1 人は、マシャミ語圏でも、民族語の保持と発展を目的として、マシャミ語による教会でのワークショップやマシャミ語による読み物の自主販売などが行われているが、地域社会の協力が徐々に得られなくなっており、今では活動への参加率は低くコストばかりがかさんでいる状況であると語った。

[4] チャガ・グループの全体像を示すには本稿のデータは全く十分ではないが、佐藤(2000)の調査が行われた 1990 年代後半以降、民族語に対する意識に変化が起こったことが推察されるので、今後、さらなる調査が必要であると考えている。

けさせたいか」という質問に関して、それぞれの地域で得られた答えをまとめると表8、9のようになった。

表8：全てのレベルの教育で教授用言語が統一されるとしたらどの言語を選ぶか

言語	イラク語圏農村部		イラク語圏中心部		マシャミ語圏	
	人数	%	人数	%	人数	%
スワヒリ語	8	40	5	42	6	20
英語	2	10	4	33	19	63
今のまま/ 両方	8	40	3	25	4	13
どちらとも言えない	2	10	0	0	1	3
合計	20	100	12	100	30	100

表9:子ども/ 孫にどの教授用言語で教育を受けさせたいか

言語	イラク語圏農村部		イラク語圏中心部		マシャミ語圏	
	人数	%	人数	%	人数	%
スワヒリ語	6	30	3	25	5	17
英語	8	40	9	75	24	80
英語とスワヒリ語	6	30	0	0	1	3
合計	20	100	12	100	30	100

これらの表から、各地域の回答に特徴が見られることが指摘できる。まず教授用言語に関しては、イラク語圏農村部では「スワヒリ語」あるいは「スワヒリ語と英語の両方/ 今のまま」という回答が多く、イラク語圏中心部では農村部に比べて少し英語の割合が上がる。マシャミ語圏では英語という回答が圧倒的に高い。このような違いは、それぞれの地域における言語の使用状況と、以下に述べるような言語の階層性の認識から来ているものでないかと考えられる。

今回の調査において、どの地域にも共通して「民族語＜スワヒリ語＜英語」というはっきりとした言語の階層性が認識されていた。たとえば、イラク語が衰退しているかという質問に、「人々は梯子を上る必要があるのであって、降りるのではない」というような比喩を用いて答える人がいるなど、スワヒリ語や英語が上（あるいは進む先）にある言語、民族語はその下（あるいは進む方向とは逆）にある言語であるという認識が一般的に見られた。

また、イラク語圏とマシャミ語圏の両方を合わせると、「すべての人がスワヒリ語を話せ

るようになれば民族語が衰退しても構わない」と答えた人が 62 人中 21 人（34%）、「すべての人が英語を話せるようになればスワヒリ語は衰退しても構わない」と答えた人が 6 人おり、発展（「前に進む」）のためにはより階層の高い言語への移行が求められるというような認識があることもうかがえる。

このような認識に、実際の言語使用に関する意識の分析結果を合わせて考えてみると、イラク語圏農村部では地域にスワヒリ語の運用能力が十分とは言えない人がしばしば見られるような状況から、まずは「民族語からスワヒリ語への移行」が目指されているため、スワヒリ語をより重視する言語選択が行われていることが考えられる。イラク語圏中心部では、スワヒリ語の浸透度は農村部に比べて高いが、民族全体で見た場合、農村部にはスワヒリ語の運用能力が十分でない人が多くいるという認識があることから、スワヒリ語の重要性を意識し、英語という回答がそこまで高くならなかったのではないだろうか。一方マシャミ語圏の場合は、この地域においてスワヒリ語がすでに「習得済み」の言語であり、次の段階にある英語への移行が求められ始めていると考えられ、マシャミ人を含むチャガ・グループがタンザニアにおいて多くのエリートを輩出する高学歴・高収入な民族であることもその要因であると推察される。

また、「子ども/ 孫にどの教授用言語で教育を受けさせたいか」については、どの地域でも英語を求める声の割合が大きくなるが、やはりイラク語圏農村部ではスワヒリ語を求める声が依然として一定の割合を占めている。さらに、これらの英語を求める人々のうち、実際に子どもや孫を、英語を教授用言語とする私立の幼稚園や小学校に行かせている人が一定数おり、子どもたちが家に「聞いたことのないことば」を持ち込んでいるという声が聞かれた。また、私立の小学校に通う子どものうち、寮に入って生活している子どもたちについて、スワヒリ語の運用能力が十分ではないために親とのコミュニケーションに支障をきたす場合があることに 62 人中 5 人が言及した。

一方、民族語に関しては、すべての人が否定的な態度を取り、「トライバリズム(Ukabira)」を再興させ、「国家統合(Umoja)」を脅かすというような常套句が理由として用いられた。

3. まとめ

ここまで見てきた内容をまとめると、タンザニアの地域社会では一般的に認識されている「言語間の階層性」にしたがって、それぞれのステージに合った言語選択がなされていると言える。そして、そこには「教授用言語をめぐる英語とスワヒリ語の対立」と「日常

言語における民族語の領域へのスワヒリ語の浸透」のような分けられた区分認識はなく、無自覚に英語という単一言語社会への移行が目指されているように見える。もちろん、民族語の歴史的・文化的価値を訴える声や、国家語としてのスワヒリ語への誇りを語る声はあるものの、民族語の使用領域であった「家庭」や「民族コミュニティ」におけるスワヒリ語の浸透、スワヒリ語の重要な使用領域であった「小学校教育」への英語の浸透に対して非常に寛容に受け入れているという現状がある。特に民族語は多くの人の認識の中では最下層に位置する言語であるため、非常に消極的な言語態度しか示されず、「民族語は「トライバリズム」を再興させ国家統合を脅かす存在」というプロパガンダの浸透により、比較的ステイタスの高い民族語に関してもその価値は認められていない。そのような状況から、民族語の使用や民族語を称賛する態度は、先行研究で見られたものよりも一層消極的なものとなってきていると思われる。

Rubagumya は、一部の親たちにとって、「英語」が「教育」と同意語となっている状況を指摘している(Rubagumya 2003: 156-157)が、今回の筆者の調査においても、「英語＝教育」あるいは「英語＝発展」という明らかな認識が見られた。このような強烈な言語イデオロギーの存在は、今後ますますタンザニアの人々の言語態度に影響を与えていく可能性がある。

これまでの研究では、スワヒリ語が民族語の領域に浸透し、英語がスワヒリ語の領域に浸透しようとしている状況が連続的な変化であるという認識はほとんどなされてこなかった。しかし、各領域における人々の言語選択と言語使用の背景には、言語の機能的な問題だけではなく、「民族語＜スワヒリ語＜英語」という階層を形成し強化しているあらゆるイデオロギーの存在や、各言語集団の社会的な権力関係の影響がある。タンザニアにおいては、これらの総合的な結果として人々の認識における民族語やスワヒリ語への重要度が下がり、英語の重要度が増しているために、英語使用推進の動きが加速していると捉えるべきである。

また、今回の調査によって、意識的なレベルで言えば民族語の領域への英語の浸透は十分に可能であり、むしろ一定数の人々がスワヒリ語や民族語の領域が英語にとって変わられることを望んでいるという現実も見えてきた。現に、Rubagumya が都市の私立小学校に子どもを通わせる親たちに行ったインタビューでは、家庭で用いる言語として 20.2%が「英語だけを用いる」と答え、64.7%が「英語とスワヒリ語の両方を用いる」と答えている(Rubagumya 2003: 157)。著者自身、タンザニアにおけるスワヒリ語の浸透度の高さを考慮

すればこれらが現実の言語使用と一致する数字とは言えないと判断しているが、意識的なレベルでの言語の取り替えが都市部ではかなり進行していることがわかる。

タンザニアの社会言語学的な状況を、英語による言語帝国主義、多言語主義、言語権、アイデンティティの問題など、様々な価値の交差する場としてより正確にとらえていくためにも、民族語・スワヒリ語・英語それぞれの言語に内在する社会的権力の力関係と言語領域の相関性に目を向け、各領域における言語の取り替えを連続的な変化として捉える、より包括的な研究が行われていくことが望まれる。

一方、今回の調査で確認された新たな課題もある。最も重要であると考えるのは、民族間のステイタスの差異の言語態度への影響である。今回の調査でイラク語圏とマシャミ語圏を選択したのは、語族の違いによる言語状況や言語態度への差が見られることを予測したためであったが、これらの言語圏の間で見られた差異は、むしろチャガ・グループのようなステイタスの高い民族の言語とそれ以外の民族の言語との差である可能性が考えられる。チャガ・グループは様々な先行研究も示すように、言語的には異なるいくつかのグループが 1 つの民族としてのアイデンティティを獲得した特という別な歴史を持っている(佐藤 2000; Fisher 2012 など)。タンザニアにおいて比較的裕福な民族であり、多くのエリートを輩出している民族でもある。1896 年以来行われてきたコーヒー栽培がイギリス植民地期に急速に成長し、1957-58 年には、タンガニーカにおける平均収入が 6 ポンドであったのに対し、キリマンジャロ地域の人々の収入は一人当たり 47 ポンドであった (Pratt 1976: 21)。このような高い収入によって、チャガ・グループでは比較的早い段階から教育への投資を行ってきた。また、キリマンジャロ先住民協同組合連合会(Kilimanjaro Native Cooperative Union: KNCU)という東アフリカで初のアフリカ人による協同組合が結成されるなど、政治的にも意欲的な活動が早い段階から見られた。さらに、19 世紀後半から 20 世紀にかけて教授用言語としてそれぞれの民族語とスワヒリ語の両方を用い、仕事を獲得するための英語教育にも熱心であった (佐藤 2000: 11)。現在でもキリマンジャロ地域の学力は非常に高く、2011 年の中学校修了時(Certificate of Secondary Education Examination: CSEE)でも最も合格率の高い地域である(MoETV 2012)。今回の調査ではこのようなステイタスの差異に前もって十分な配慮をしていなかったため、果たしてイラク語圏とマシャミ語圏の間に見られたスワヒリ語の浸透度合いの差やマシャミ語圏に見られた積極的な英語志向が語族の違いによるものであるかどうか、判断を見送ることとなり、分析が不十分となった。今後はこのような課題を克服しつつ、更なる研究を進めていく。

参考文献

小森淳子・竹村景子(2009)「第 13 章　スワヒリ語の発展と民族語・英語の相克―タンザニアの言語政策と言語状況」梶茂樹・砂野幸稔(編)『アフリカのことばと社会　多言語社会を生きるということ』三元社　東京 pp.385-418.

佐藤尚子(2000)「タンザニア・チャガ社会の変容と言語：キリマンジャロ州テマ村を事例に」京都大学に提出した未発表の修士論文.

竹村景子(1993)「多民族国家における国語の役割―タンザニアのスワヒリ語の場合―」『スワヒリ＆アフリカ研究』 4:34-83.

Batibo, Herman (1992) “The Fate of Ethnic Languages in Tanzania.” In Matthias Brenzinger (ed.), pp.85-98.

Brauner, S., C. Kapinga and K. Legère. (1978) “Kiswahili and local languages in Tanzania: A Socioinguistic Study. ” *Kiswahili* 48(2): 48-72.

Brenzinger, Matthias (eds.) (1992) *Language Death: Facutual and Theoretical Exploration with Special Reference to East Africa*, Berlin, New York: Mouton de Gruyter.

Brock-Utne, Brigit (2002) *Language of Instruction for African Emancipation*, Dar es Salaam: Mkuti Na Nyota.

Brock-Utne, B., Desai, Z., Qorro, M. (eds.) (2003) *Language of Instruction in Tanzania and South Africa (LOITASA)*, Dar es Salaam: E&D Vision publishing Limited.

――――― (2010) *Educational Challenges in Multilingual Societies: LOITASA Phase Tow Research*, Dar es Salaam: African Minds.

Fisher, Thomas (2012) *Chagga Elites and the Politics of Ethnicity in Kilimanjaro, Tanzania*, Edinburgh; The University of Edinburgh.

Heine, Bernd (1976) Knowledge and Use of Second Language in Musoma Region - a Quantitive Survey" *Kiswhaili* 46(1): 49-59.

Legère, Karsten (1992) “Language Shift in Tanzania” In Matthias Brenzeinger (ed.), pp. 99-115.

――――― (2002) “The 'Languages of Tanzania' project: background, resources and perspectives ”*Africa & Asia*, 2: 163-186.

Mekacha, Rugatiri D. K. (1993) *The sociolinguistic Impact of Kiswahili on Ethnic Community Language in Tanzania: A Case Study of Ekinata*, Bayreuth: Bayreuth University.

Ministry of Education and Culture (MEC), Tanzania, (1995) *Education and Training Policy* , Dar es

Salaam.

Ministry of Education and Vocational Training (MoEVT) (2012) Certifivate of Secondary Education Examination (CSEE) 2011: Report and Analysis of the Results, The Commistioner of Education Secondary Education.

Msanjila, Yohana P. (2004) “The Future of the Kisafwa Language: Acase study of Ituha Village in Tanzania.” 『アジア・アフリカ言語文化研究』 68: 161-171.

Muzale, Henry R. T. and Rugemalira, Josephat M. (2008) “Researching and Documenting the Languages of Tanzania” *Language Documention & Conservation* 2(1): 68-108.

Mwansoko, Hermas J. M. (2004) “Kiswahili Intellectualization Efforts in Tanzania.” 『アジア・アフリカ言語文化研究』67: 151-161.

Phillipson, Robert (1992) *Linguistic Imperialism*, Oxford University Press.

Polomé, Edgar C. (1980) “Tanzania: A socio-linguistic Perspective.” In Edgar C. Polomé and C. P. Hill (eds.), pp.103-138.

Polomé, Edgar C. and C. P. Hill (eds.) (1980) *Language in Tanzania*. Oxford: Oxfors University Press.

Pratt, Cranford (1976) The Critical Phase in Tanzania 1945-1968: Nyerere and the Emergence of a Socialist Strategy, Cambridge University Press.

Qorro, Martha (2006) “Does Language of Instruction Affect Quality of Education?” Hakielimu Working papers.

———— (2013) Language of Instruction in Tanzania: Why are research findings not heeded? *International Review of Education*, Springer Netherland, 59(1): 29-45.

Rubagumya, Casmir M. (1986) “Language Plannning in the Tanzanian Educational System: Problems and Prospects. *Jurnal of Multilingual and multicultural development*, 7(4): 283-300.

———— (2003) “English Medium Primary Schools in Tanzania: A New‘Linguistic Merket’ in Education?” In Brigit Brock Utne et al (eds.), pp.149-169.

Swilla, Imani N. (2009) “LANGUAGES OF INSTRUCTION IN TANZANIA: CONTRADICTIONS BETWEEN IDEOLOGY, POLICY AND IMPLEMENTETION” *African Study Monographs*, 30(1): 1-14.

Wizaraya Elimu na Mafunzo ya Ufundi, (2011) Sera ya Elimu na Mafunzo 2010, Dar es Salaam.

Wizara ya Elimu na Utamaduni (1997) Sera ya Utamaduni, Dar es Salaam.

Yoneda, Nobuko (1996) "The Impact of the Diffusion on Ethnic Languages in Tanzania: A case of study of Samatengo" *African Urban Studies*, 6: 29-73.

参考ウェブサイト

UNESCO-IBE(2010)「World Date on Education(7th edition 2010/2011) The United Republic of Tanzania」

http://www.ibe.unesco.org/fileadmin/user_upload/Publications/WDE/2010/pdf-versions/United_Republic_of_Tanzania.pdf

HABARILEO

http://www.habarileo.co.tz/

Shule za msingi serikalini masomo yote kwa Kiingereza(2014/1/27)